

# 彩の歳時記

平成二十一年 二月

わが園に梅の花散る久方の天より雪の流れ繰るかも

大伴旅人【665～731】

「我が家の庭に梅が花びらを散らす。まるで遠い空の彼方から雪が流れているようだ」  
春さればまづ咲く宿の梅の花 独りみつつや春日暮さむ 山上憶良【660c～733c-】

大宝二年(730)太宰府の大伴旅人邸で催された「梅花の宴」で詠まれた二首。旅人と憶良

は筑紫(現在の福岡)歌壇で活躍、旅人は酒を、憶良は家族を好んで詠んだ万葉歌人。

梅は「**熟実(うむめ)**」の約転で中国音「**メイ**」の転訛したもの。奈良時代前に遣唐使が

薬用の燻(いぶし)梅「**烏梅(うばい)**」を持ち帰ったといわれる。文学だけではなく日本人の生活に欠かせない梅、**源氏物語・枕草子**などにしばしば登場する「**紅梅色**」(濃紅梅・中紅梅・淡紅梅など濃さで異なる)は早春(十一月～二月)の着物の色として愛好され、平安時代に流行しました。



## 二月の異称

如月 絹更月、衣更月と綴ることも。「如月」は中国の異称で日本の「きさらぎ」は無関係。他に梅見月・衣更月・建卯月・仲春・仲の春・中の春・初花月・雪消月・麗月・令月

## 二月の暦

三日

**光悦忌** 江戸時代初期の書道家**光悦流**の祖、**本阿弥光悦**【1568～1637】の忌日。

陶芸・漆芸・出版・茶の湯にも携わったマルチアアーティスト。

**尾形光琳**とともに**琳派**の創始者。京都鷹ヶ峯にある**光悦寺**は一族や工芸職人らが住む芸術村で境内に墓碑。代表作に**【国宝 風神雷神図屏風】**

**【国宝・黒楽茶碗・雨雲】****【赤楽茶碗・峯雲】****【国宝 舟橋時絵硯箱】**



三日

**節分** 古来は季節を分ける、**立夏・立秋・立冬**の前日も指したが現在は**立春**の前日のみを言う。春を一年の初めとしたので大晦日のこの日、**追儺(ついな)**(平安時代に陰陽師による「一年の穢れを祓う」行事の一つ「**豆まき**」が全国各地の寺社で行われる。

四日

**春分(二十四節気)**「暑さも寒さも彼岸まで」と言われるように寒さも和らぐ。春の彼岸はこの日を中心前後三日間、初日を「入り」中の日を「中日」最終日を「明け」と呼ぶ。彼岸の菓子、**ぼた餅(牡丹に因む)はあずき**の赤色が古くから邪気を払うと信じられたことから、先祖の供養と結びついた。因みに秋は萩の季節なので「おはぎ」と呼ばれる。



九日

**針供養** 針に糸をさせ労に感謝するため、古針を豆腐やこんにやく刺す行事。浅草寺境内の淡島堂が有名で和裁にたずさわる和装の女性で賑わう。



十一日

**建国記念日** かつての**紀元節**。**神武天皇**が即位したとされる日に由来する国民の祝日。

十四日

**バレンタインデー** ローマ帝国時代の**結婚と家庭の女神ユノ**の祭典。キリスト教司祭**バレンタイン**が禁止されていた兵役中の兵士を結婚させ、処刑された日が**ユノ**の祭典の日だったことに由来。

十八日

**雨水(二十四節気)** 空から降るものが雪から雨に替わる頃、

## 二月の歌

**早春賦** 詞・吉丸一昌 曲・中田章 大正二年

題名の「賦」は漢詩・漢文の形式の一つ。歌詞は現在では理解されにくい文語体ですがメロディにのると美しい調べとなり、今も愛唱されています。

①春とは名ばかりで、まだ風が冷たく寒い。谷では鶯が春を告げようと思ってもまだその時ではないと声を潜めている。

②氷が解け、葦が角ぐむ(あたかも角が出てくるように芽を出す)「さあ春だ」と思ったけれどあやにく(あいにく)間が悪い)

③「春」と聞かなければ知らないでいたけれど聞いてしまうと急かれる胸の思いどうしたものかと思うこの頃だ。



①春は名のみの風の寒さや 谷の鶯 歌は思えど  
★時にあらずと声も立てず  
②氷解け去り葦は角ぐむ さては時ぞと思うあやにく  
★今日もきのうも雪の空  
③春と聞かねば知らでありしを 聞けば急がる胸の思いを  
★いかにせよとのこの頃か  
★は繰り返し